

## ドイツ囲碁史研究 (2)

杉 浦 康 則

### 1 はじめに

2020年、世界中で新型コロナウイルスが蔓延し、ドイツでも多くの人々が犠牲となった。この状況の中メルケル首相は3月18日、ドイツ国民に向けた演説を行い、この事態が第2次世界大戦以来のドイツに対する挑戦であり、皆の連帯行動が重要であることを訴えた。また、ウイルスの蔓延を抑え込むために、様々な活動がこれまでにないほど制限されている点についてもこの演説では述べられた<sup>1</sup>。もちろんこの事態はドイツ囲碁界にも影響を及ぼし、多くの囲碁大会が中止となった。しかし、この逆境においてもドイツ囲碁界の活動が完全に停止することはなかった。2020年3月19日、「ドイツ碁連盟」(Deutscher Go-Bund) ホームページ上の「ニュース」(Nachrichten) にマーク・オリヴァー・リーガー (Marc Oliver Rieger) による次のような記事が掲載された:

数か月以内の多くの囲碁大会が、残念ながら取りやめられなくてはならなかった。しかし (サッカーとは異なり) 幸運なことに、囲碁はインターネットを通じて、感染の危険を冒さなくてもプレイすることができる。それゆえ、2つの特別に組織されたインターネットでの大会に、私たちは注意を喚起したい。<sup>2</sup>

ここで言及された「2つの特別に組織されたインターネットでの大会」とは、3月28/29日に行われた「春季大会」(Frühlings-Turnier) と3月23日から4月26日にかけて行われた「コロナ杯2020」(Corona-Cup 2020) である。共にKGS<sup>3</sup>上で行われたこれらの大会については、その公示や結果報告が連盟ホームページ上に掲載されている<sup>4</sup>。第2次世界大戦以来の挑戦と言われる時期にも、インターネット碁という現代の対局手法のおかげで、ドイツ囲碁界の活動が完全に停止するような事態にはならなかったのである。

このように2020年の危機的状況においても活動を続けたドイツ囲碁界は、メルケル首相によって引き合いに出された第2次世界大戦時にもその歩みを止めることがなかった。それどころかむしろ当時、囲碁はドイツにおいてその知名度を大きく高めるチャンスを迎えていた。なぜならナチスによって囲碁が促進されたからである。この促進の発端となったのは、1936年9月29日の『フェルクキッシャー・ベオーバハター』(Völkischer Beobachter) において告示された、フェリックス・デューバル (Felix Dueball 1880-1970) 対鳩山一郎 (1883-1959) の電報を用いた対局であった<sup>5</sup>。翌日には同紙において囲碁のルールが説明され、さらに10月1日に対局の一例が掲載された後、10月3日、デューバルの初手によって9月30日に対局が開始されたことが報告された<sup>6</sup>。その後も徐々に対局の進行が報告され、時折対局自体とは異なる内容の記事も掲載された。例えば11月12日の同紙においては、この対局によって囲碁への関心が高まった結果、ベルリンで碁盤を入手できなくなっていたこと、そしてベル

リンのおもちゃ工場が比較的多くの碁盤を製作したことにより再び入手可能となったことが述べられている<sup>7</sup>。その後11月26日には、鳩山の勝利によって終局した旨と共に、この対局が囲碁プレーヤーではない者たちからも注目され、文化政策の分野において、ドイツと日本の相互理解に影響をもたらす大成果を上げたという主張が掲載された<sup>8</sup>。

このように第2次世界大戦直前に高まった囲碁への関心から、その後どのような活動がドイツにおいて行われたのだろうか。大戦終盤に多くの資料が失われてしまったという事情<sup>9</sup>からその全容解明は困難であるものの、本稿においては、ドイツに残された資料及び邦文献から当時の囲碁界の様相を示すことを試みる。「ドイツ囲碁史研究(1)」において述べた通り、日本でドイツの囲碁史があまり知られておらず、現在に至るまでの歴史をある程度示しておくことが必要だろうという点がこの試みの動機の一つである<sup>10</sup>。しかし、この研究のより大きな目標は他の点にある。

21世紀初頭、ドイツ碁連盟の構成員数が大幅に増加し、ドイツ囲碁界は活気に満ちた時期を迎えていた。もちろん連盟構成員たちもこの活気を感じ取り、アンドレアス・フェッケ(Andreas Fecke)は21世紀初頭を「長年経た後に、久しぶりにドイツの囲碁展望が再びポジティブな方向に変化している時代」と捉えている。本研究の目標は、この発言を念頭に置きながら歴史概観することである。現代に至るまでドイツの囲碁が発展するための機会は、どれほど長期に渡り訪れなかったのか。また、「再び」ポジティブな方向に変化しているということは、かつてドイツで囲碁発展の展望が開けていたのか。ドイツへの囲碁到来からの歴史を振り返る中で、これらの点を明らかにしていくことを本研究は目指している<sup>11</sup>。この目標に向け、「ドイツ囲碁史研究(1)」におけるドイツ囲碁史の黎明期の描写に続き、ナチス時代のドイツ囲碁界の様相を示すこと、つまり、現代までのドイツ囲碁史の描写に向けてさらに歩を進めることを本研究の2手目とする。

## 2 エムスラント収容所アシェンドルフ湿原支所

「ドイツ囲碁史研究(1)」で述べた通り、ドイツ碁連盟が1937年に創られ、囲碁は帝国青少年指導部の教育、報道、宣伝部局担当者ヴァルター・ブラヒェッタ(Walther Blachetta 1891-1959)の指導の下、国家的なプロジェクトとして促進された<sup>12</sup>。しかし、このような形の促進とは別に、他の形態での囲碁への取り組みがあったことから指摘したい。

1942年頃から第2次世界大戦終了までユダヤ人を収容した強制収容所はよく知られているが、それに先立ち、ナチスの政策に同意しないドイツ人も強制収容所に送られていた。その1つが「エムスラント収容所アシェンドルフ湿原支所」(Emslandlager Aschendorfermoor)であり、1937年から1939年までそこには共産党や社会民主党の支持者たち、あるいは特定の政党を支持しない者たちが収容されていた。彼らの多くはチェスをすることができ、多くの者たちが収容所での生活によってうつ状態になる中、それは1つの救済であった<sup>13</sup>。被収容者であったフランツ・シッファー(Franz Schiffer)は収容所での生活について次のように述べている：

私は『反逆に向けて準備をした』という理由で合計5年6か月間拘留されていた。この時期私は、1937年3月から1939年7月までアシェンドルフ湿原にいた。[...] 私たちの収容所には、それぞれ100人の囚人たちのためのバラックが14あったが、そこにはほぼ倍の

数が押し込まれていた。アシェンドルフ湿原の収容所には共産主義者たち、社会民主主義者たち、そして無党派の者たちが拘留されていた。周辺は湿原と荒野であり、それを私たちは開墾しなくてはならなかった。突撃隊による監視は収容所の外でも続けられた。不十分で質の悪い食事が日常であり、ひどい待遇が多くの人々を精神的に破壊した。そのような時に、道徳的にも身体的にもより弱い者たちを、最も優れた者たちの連帯が救った。組織的スポーツとゲーム（収容所マイスターシャフトも行われた）が非常に多くの人々を救ったのである。収容所内の1800人のうち、約1400人がチェスをした。<sup>14</sup>

1938年にエムスラント収容所アシェンドルフ湿原支所に収容されたヴァルデマー・ヴァーラート（Waldemar Wahlert）は、ここで言及されたチェス大会において優勝した。その後、彼は収容所での囲碁普及を開始し、短期間で数百人が囲碁プレーヤーとなった。そしてチェスと同様、囲碁によって多くの者たちが苦難を乗り越えたのであった。この収容所で囲碁を学んだシッファーは次のように述べている：

碁盤は厚紙から作られ、黒い碁石はほぼ黒色の堅い木である湿原のオークから作られた。白石も同様に、明るい色の木から手間をかけて作られた。比較的短期間で私たちは収容所内の数百人の囲碁プレーヤーとなっていた。囲碁は私たちにとって新しく、すばらしい物であったため、私たちを励まし、多くの者たちを無気力状態から抜け出させた。完全に意思を失っていた人々が、このゲームによって新たな人生に向けて目覚めたのである。<sup>15</sup>

シッファーたちは1939年の釈放後も囲碁に助けられながらナチスに抵抗し<sup>16</sup>、第2次世界大戦を乗り越えた。彼らにとって当時の囲碁の思い出は忘れられないものであり、1982年5月にシッファーを訪れた際、ヴァーラートは「私は君に会うと、収容所において囲碁がもたらした作用を思い起こす」と述べている。そして当時のことを振り返り、囲碁によって「無気力だった人々が再び周囲の世界に関心を抱き、精神的に活発になったことを私は誇りに思う」と回想している<sup>17</sup>。

### 3 ヴァルター・ブラヒェッタ

前章で叙述したような活動があったものの、当時のドイツ囲碁界をけん引したのはナチスであり、中心人物となったのはブラヒェッタであった。本章では、ブラヒェッタの生涯について簡潔に叙述する。

1891年にプレス（Pleß）に生まれたブラヒェッタは、第1次世界大戦に従軍後、小学校教師、役者、劇場支配人を務め、1927年あるいは28年にヒトラー・ユーゲントに入り、1931年12月1日にナチス黨員となった。1933年末、彼は帝国青少年指導部の教育、報道、宣伝部局担当者となり、同時に1933年1月から1936年まで、ベルリン帝国放送局の専門部局担当者を務め、民謡やアマチュア演劇等に並び、ボードゲームも彼の担当分野に含まれていた<sup>18</sup>。

本稿冒頭で、ナチスによる囲碁促進の発端として1936年の電報対局に言及したが、その後の経過の中で、ブラヒェッタはドイツ囲碁界のリーダーに指名されることになる。日独電報対局が防共協定の調印の日に終局したことはおそらく偶然ではなかった。この対局

とメディアによるその普及は、日本の大衆文化をドイツで普及させる最初の試みであり<sup>19</sup>、1936年12月の『バイアース・フュア・アレ』（Beyers für alle）には、「クラフト・ドゥルヒ・フロイデ」（Kraft durch Freude、以下 KdF）が囲碁コースの実施を既に決定していたことが、次のように述べられている：

国家社会主義共同体『KdF』は既に囲碁を冬のプログラムに取り入れた。大ベルリン大管区内だけでも、1月に20の囲碁コースが予定されている。（これまでのドイツ人囲碁愛好家数は約1000であった。）間もなく帝国青少年指導部が同様の決定をする[…]<sup>20</sup>

また、1937年からドイツ囲碁界で活躍した福田正義（1899-1981）に第5章で言及するが、ドイツで囲碁活動が盛んになった理由について福田もナチスの団体名を挙げて次のように述べている：

尤も之れには、私がドイツに参りましてから後に、彼のヒトラーユーゲントとカー・デー・エフが囲碁を公認の遊戯として確定した事が、與つて力となつて居る事は疑ひがありません。御承知のやうにヒトラーユーゲントは、將來のドイツを脊負つて起つ青少年の中堅團體であり、カー・デー・エフはナチ・ドイツ擁護の中樞團體であります、此の代表的な兩團體が、圍碁は推理と思索と綜合との力を養ふ上に於て、娯樂と修養とを兼ねた絶好の遊戯であると公認し、努めてそれが研究練磨を勸奨してゐるのでありますから、自然其の影響が國內の各方面に力強く波及しつゝあるのであります。<sup>21</sup>

そして1937年1月8日には、日独電報対局が『フェルキッシャー・ベオーバハター』の読者たちに呼び起こした関心や、日独文化交流の点における囲碁の意義等を考慮して、同紙において定期的に囲碁の対局が掲載される旨が告げられた<sup>22</sup>。このような状況において1937年にドイツ碁連盟が創られ、同年12月には「ドイツ碁研究所」（Deutsches Go-Institut）も創設された<sup>23</sup>。連盟の会長はデューバル、副会長はブラヒェッタ、研究所の所長は退役海軍大将で日独協会会長のリヒャルト・フェルスター（Richard Foerster 1879-1952）、幹事がブラヒェッタであった<sup>24</sup>。デューバルはドイツ囲碁界のシンボリック的存在であるため、ナチスドイツの囲碁活動を直接的にけん引したのがブラヒェッタであったことは明らかである。研究所の住所はブラヒェッタの自宅であり、プログラムの組織や碁の指導を、妻に支えられながら実質的には彼が1人で行った。しばらくして彼はベルリンのシャルロテンブルクからシェーンアイヒェのアドルフ・ヒトラー通り130に転居するが、転居後も研究所の住所はブラヒェッタの自宅であった<sup>25</sup>。

1943年にブラヒェッタが52歳で兵役に就いたことで研究所の活動は幕を閉じ、さらに1944年、研究所は爆撃によって破壊された。1945年、彼はチェコスロバキアで捕虜となり、1947年あるいは48年に帰国。妻と共にフランクフルト・アム・マインに転居し、その後、彼がドイツ囲碁界と再び接触することはなかった。『ドイツ碁新聞』1953年第2号には、ブラヒェッタは戦死した囲碁プレーヤーの1人として挙げられるが、同紙の1955年第5号において、彼が妻と共にフランクフルトに暮らしていることが伝えられた。しかし、その後も彼は1959年に68歳で亡くなるまで、ドイツ囲碁界と関わりを持つことはなかったようである<sup>26</sup>。

では、ブラヒェッタ率いるドイツ囲碁界では主にどのような活動が行われたのだろうか。次章ではこの点に焦点を当てたい。

#### 4 ドイツ碁連盟の活動

1937年に創設されたドイツ碁連盟の主な活動の1つは、囲碁コースの開催であった。ブラヒェッタとデューバル等による討論の結果、帝国全土で囲碁コースを開催することが決定され、それが1937年の『ドイツ碁新聞』において報告された。このようなコースの実施には囲碁を教えることができる者たちが必要であり、ブルーノ・リュウガー(Bruno Rüger 1886-1972)は『ドイツ碁新聞』において、囲碁コースを提案するためにKdF等に関わり合わせるよう、全読者に勧めている<sup>27</sup>。

このように、囲碁コースは第3帝国全体で行われることが計画されていた。各大管区が区分され、それぞれの地区で囲碁コースを開催し、コースの最後に大会が開かれることになっていた。その勝者たちは大管区で最強のプレーヤーを決定するための大会で対局することになっていた。そしてさらに、このようなピラミッド形式で大会を進行させ、第3帝国最強のプレーヤーを毎年決定することになっていた<sup>28</sup>。

しかし、ベルリン以外において実際に行われた囲碁コースの記録はほとんど見出されず、例外はハンブルクのみである。ハンブルクの囲碁活動についてはニュースレターが見ついている。ハンブルクの囲碁指導者は開業医で日本文化の専門家、そして親衛隊情報部員のヘルムート・パルミエ(Helmut Palmié)であった。1931年頃から囲碁に取り組んでいた彼は、ハンブルク大管区の一部で活動し、1939年の初めから毎月A4判で6ページのニュースレターを発行したが、それがいつまで継続されたかは不明である<sup>29</sup>。

ベルリンの囲碁コースに関しては、1937年10月からのコースがどのように予定されていたか、当時の新聞に示されている。全てのコースが8回の講義で構成され、その時間帯は主に20時から21時30分までであった。コースへの登録には2ライヒスマルクがかかった。囲碁コースはシャルロッテンプルク等の5箇所において実施が計画され、どのコースも入門者向けであった。これらの5コースのうち、2つが木曜および金曜の同時刻に予定されていた。つまり少なくとも2人の指導者が活動していたということになる。しかし、実際にこれらのコースが全て実施されたのかどうかは不明である<sup>30</sup>。

このような囲碁コースの実施に並び、ドイツ碁連盟が行ったもう1つの主な活動は、ベルリンでのドイツ選手権の開催であった。1938年4月11日から13日にかけて、第1回ドイツ選手権大会が行われ、連盟によって招待された14人のプレーヤーたちが様々な都市から参加し、優勝したのはフリッツ・デューバル(Fritz Dueball)であった。その父フェリックスは病気のため、対局自体には参加しなかったが、次章で言及する福田と共に審判としてその場に居合わせた<sup>31</sup>。第2回大会は1939年4月6日から10日までベルリンで行われ、参加者は13人であった。1日3局の総当たり戦が4日間行われ、その結果、プレスラウ出身のガーマイスター(E. Garmeister)がこの年の囲碁マイスターの称号を得ることになった。そして前年の勝者であるデューバルと、ドイツ選手権獲得を巡って対局する権利を手にした。その後も毎年同時期に選手権は開催され<sup>32</sup>、1942年にも多くの参加者の下で実施されたことが『圍棋クラブ』の記事に示されている：

四月一日午後六時に、ベルリンでも一流のカイザー・ホーフといふホテルがありますが、そこで發會式をやりました。出席者はドイツ側では日獨協會々長のフェルスター大將、それから皆さんお馴染のデューバルさんなどを初めとして、總勢百名。[...]これに對し、日本側は佐久間公使外四十名でした。[...] 第二日目から、つまり四月の二、三、四の三日間、毎日午前十時から午後十時まで選手權爭奪の熱戦が繰展げられたんです。[...] その結果、一等が大デューバルさん。[...] 二等が小デューバルさん、つまり息子さんの方です。[...] ひとたび圍碁がドイツに傳はるや、その熱は大したもの。指導者たちもその價値を大いに認めて、獎勵に努めてゐますよ。今ヒットラー・ユーゲントは前線に活躍中でこつちには少いのだけれど、それでも碁を教へて呉れといつて來る人はなかなか多くて、それにはやはり私が主として指導に當つてゐます。ヒットラー・ユーゲント以外の人達でも、盛んにドイツ各地から棋譜を送つて來たりして、私に批評と指導を頼んで來ます。<sup>33</sup>

しかし、1943年になると選手權は、ベルリンに暮らすドイツ人と日本人による2日間、各チーム10人の日獨對抗戦に規模縮小された。続く1944年にもドイツ選手權は開催されず、2日間、各チーム8人の日獨對抗戦となった。この頃には、爆撃によって対局時計が破壊されていたため、正確に考量時間を管理することはできなくなっていた<sup>34</sup>。

## 5 福田正義の活躍

本稿で述べてきたナチス時代のドイツ圍碁界の活動にとりわけ大きく関わった日本人として、福田正義が挙げられる。本稿のまとめを行う前に再び日獨電報対局当時までに遡り、この人物の活動描写に章を割きたい。

デューバルと鳩山の対局がドイツにもたらした圍碁熱は、日本の圍碁界でも注目され、1937年の『圍碁クラブ』には次のような記事が掲載された：

空前の人氣を呼んだ日獨國際電報碁は、遂に日本鳩山二段に凱歌があつて、芽出度終局となつたが、この東日社が投じた一石は意想外の波紋を描きドイツ國內に勃然として圍碁熱があがり、ドイツ最大の新聞で、この企てを東日社と共同主催したフェルキツシエ・ベオバハター紙に、連日掲載された棋譜面に好奇心をかられ、紙製の碁盤は飛ぶやうに賣れ、解説書も面白いやうに各書店から消えて行く、この機運を看取したデューバル氏をはじめドイツ棋客を中心に日本人會の孫田博士その他の愛碁家が、日本棋院支部をベルリンに設置し、さらに専門棋士の派遣を乞ふて、將來日本に對抗し得るプロ棋士を養成しやうと昨夏のオリンピック大會の際、ベルリンを訪れた棋院副總裁大倉喜七郎男との間にも、大體の諒解を得た東日社へも支部設置及棋士派遣方の斡旋を依頼して來たとの由。これが實現の暁にはいよいよ圍碁の國際化が強められるわけである。<sup>35</sup>

日本棋院から派遣されることになった棋士は福田正義であり、『圍碁クラブ』第13巻第8号には「ドイツの圍碁熱 三千名を突破したゴ・ナチスの鼻息 棋院から福田五段を迎へていよいよ本格的に！！」という記事が掲載された。ドイツにおける圍碁の大流行について述べたこの記事では、「日本棋院から福田五段を派遣し同時にベルリンに棋院の支部をも設

立することに決定した」こと、そして「ドイツにはいま三千人以上の碁好きがある」ことが報告されている<sup>36</sup>。

福田は1937年から1939年までベルリンに滞在した<sup>37</sup>。ベルリン滞りが3か月経過した頃の日課について、彼は次のように述べている：

此頃の私の日課は大體左の通りでございます。

火曜日 午後八時よりゴブントの會

水曜日 午後七時頃より日本人會碁會

金曜日 獨逸人有志の會

土曜日 隨時講習會

この外に臨時があり、また新聞その他に掲載する原稿書等忙しい日を送つて居ります。火曜日のゴ、ブントの會には二三局打つ外、一時間程置碁頂け定石の講義を致します。[…] 金曜日の會は特別熱心な獨逸人ばかりの集まりで場所は「クニー」といふ處にある「カフェー」の奥の一室であります。<sup>38</sup>

また、福田の指導の下、ベルリン近郊で復活祭の休日に1週間の囲碁コースが行われ、それはベルリンでのドイツ選手権に続けて行われるようになった<sup>39</sup>。ブラヒェッタはKdFに向けた囲碁の規則説明の記事に続けて、「エルガースブルクにおける1938年復活祭の、『囲碁』のための教育週間」を予告している。4月14日（木）から20日（水）までの1週間、福田によってこの囲碁コースはイルメナウの古城エルガースブルクで実施されることになっており、食費と宿泊費を合わせて1日4ライヒスマルク、授業料は1週間で1ライヒスマルクとされ、入門者向けの授業と経験者向けの授業が行われることになっていた<sup>40</sup>。

当時のドイツ囲碁界の発展に、福田の活動が非常に大きな役割を果たしたとブラヒェッタは見えており、それは1941年の『圍棋クラブ』に掲載されたブラヒェッタによる記事に示されている。彼によると、福田が1937年11月にドイツに到着した際、ドイツの囲碁プレーヤーはまだ非常に少なく、おそらく存在したのは数百人程度のプレーヤーたちだったが、彼の到着の直前にドイツ碁連盟が創設され、到着直後にドイツ碁研究所が創られた。そしてドイツ労働戦線、KdF、ヒトラー・ユーゲント、学校、教育雑誌、そして多くの新聞が入門コース及び講習会を行い始めたのである<sup>41</sup>。そして安価な囲碁セットが生産され、約50000から60000セットが販売されたことから、ブラヒェッタはこの記事が書かれた当時の囲碁人口について、「注意深く見積もっても[…] ドイツには50000人の囲碁プレーヤーたちがいるに違いない」と主張している<sup>42</sup>。また、福田自身も1940年、「ドイツ人と圍碁」という記事の中で当時のドイツ囲碁界の発展について次のように描写している：

私がドイツに参りました當時、ドイツ國內に在つた碁盤の數は、總計約一千面であらうと概算されて居りましたが、後に私の在留中、ベルリンを初めとして各地のデパート等で盤石を賣出した處、一萬面の碁盤が賣盡されたといふ事を聞き及びました。[…]

よし如何なる盤石でありませうとも斯の如く澎湃たる盤石の需要増加は、まさに興隆の途上にあるドイツ碁界に取つて、見逃してはならぬ一事實だと思ひます。勿論碁盤の賣れる事と圍碁の普及とが、必ずしも同一意義を有するものとは申しません。而してまた

私がドイツに行つたから、斯の如く急に碁盤が賣れ出したとは申しませんが、併しドイツ国民が近年如何に圍碁に關心を持つやうになつたかを談る一證左と爲すには足ると思ひます。<sup>43</sup>

福田は帰国後も、ドイツに圍碁を普及させる熱意を失わなかつた。1940年12月27日早朝4時40分、彼は海外短波放送局においてドイツに向けた講演を行った。彼はドイツ人圍碁愛好家たちのためにドイツ語で書かれた小冊子を出版することを自らの任務と考え、この年の10月にそれが完了した旨をこの講演で述べている。そして機会があれば再びドイツを訪れ、皆に再会したいという望みによって、この講演は締めくくられている<sup>44</sup>。

## 6 まとめ

ドイツへの圍碁到来からの歴史を振り返る中で、ドイツで圍碁発展の展望が開けていた時期を探るといふ本研究の大きな目標は、現代までのドイツ圍碁史を一通り描写した上でのみ十分に達成できるものである。しかし本稿のまとめとして、冒頭で引用したフェッケの発言を念頭にナチス時代のドイツ圍碁界の活動のみに焦点を当ててみると、この時代、ドイツの圍碁がポジティブな方向に向かつていたことは明らかだろう。日独電報対局によって呼び起こされた圍碁への関心は、日本棋院による関与の下、ドイツ碁連盟やドイツ碁研究所の創設につながり、ドイツ人圍碁プレイヤーの数は膨れ上がった。とりわけヒトラー・ユージェントでの圍碁コースの実施は、ドイツ圍碁界の発展の可能性を高めるものであったに違いない。

しかし、まさに圍碁を促進したナチスの助力は戦後、このゲームに対する疑念的態度を呼び起こすこととなった。とりわけ東ベルリン、ザクセン及びその近隣地域、つまり、戦前に圍碁プレイヤーたちの大多数が暮らしていた地域においてそうであった<sup>45</sup>。ニュルンベルクのレオンハルト・グレーベ (Leonhard Grebe 1898-1975) が『ドイツ碁新聞』の発行を再開し、ドイツ碁連盟を再建するまで、しばらく時間を要することとなった。したがって、ナチス時代だけでなくその後にも視野を拡大すれば、この時代の活動はむしろドイツの圍碁発展にネガティブな作用をもたらしたことになる。また、そもそもフェッケが上述のような発言をドイツ碁連盟のフォーラムに掲載した際に、ナチス時代の圍碁活動を念頭に置いていたなどとは到底考えられない。本研究の目指す解答にたどり着くためには、さらに時代を進めてドイツ圍碁史を概観していかななくてはならないだろう。

<sup>1</sup> <https://www.ksta.de/politik/merkels-corona-ansprache-im-wortlaut-nur-abstand-ist-der-ausdruck-von-fuersorge-36435620>

<sup>2</sup> <https://www.dgob.de/go-in-zeiten-von-corona/>

<sup>3</sup> KGS については次の文献を参照。杉浦康則：『21世紀初頭のドイツ圍碁界』（北大生協印刷・情報サービス部）2020、8頁。

<sup>4</sup> <https://www.eurogofed.org/tm/files/tournaments/Corona%20Cup%202020%20-%20EN.pdf>; <https://www.dgob.de/organisation/nachwuchsfoerderung/fruehlingsturnier/>

<sup>5</sup> デューバルについては次の文献を参照。杉浦康則：ドイツ圍碁史研究（1）『独語独文学研究年報』第44号、2018年、127-142頁]135-136頁。

<sup>6</sup> Dr. My.: „VB.“ veranstaltet internationale Go-Partie. In: Völkischer Beobachter (29.9.1936), S.4; Anonymus: Wie spielt man GO? In: Völkischer Beobachter (30.9.1936), S.4; Anonymus: Die Musterpartie. In: Völkischer Beobachter (1.10.1936), S.10; Anonymus: Die Go-Partie hat begonnen. In: Völkischer Beobachter (3.10.1936), S.4.



- <sup>7</sup> Anonymus: Schwarz raubt Augen. In: Völkischer Beobachter (12.11.1936), S.4.
- <sup>8</sup> Dr. Gerd Miekeley: Hatoyama siegte mit 46:39. In: Völkischer Beobachter (26.11.1936), S.4. 12月4日に行われた祝典においてアルフレート・ローゼンベルク (Alfred Rosenberg 1893-1946) はこの対局を称え、鳩山には『我が闘争』が、デューバルには『20世紀の神話』が贈られた。また、ローゼンベルクはこの祝典において「日独文化交流の意味におけるこの国際対局の意義」を指摘している。Vgl. Anonymus: Feierstunde im Außenpolitischen Amt. In: Völkischer Beobachter (5.12.1936), S.4.
- <sup>9</sup> Franco Pratesi: Eurogo2. Go in Europe. Part 2: 1920-1950. Florence (Multimage) 2003, S.41, 61.
- <sup>10</sup> 杉浦 (2018), 131頁。
- <sup>11</sup> 同上, 130-131頁。
- <sup>12</sup> 同上, 142頁。
- <sup>13</sup> Pratesi (2003), S.40.
- <sup>14</sup> Hans-Dietrich Pester: Beiträge zur Geschichte des Go. In: Go-Mitteilungen: Arbeitsblätter der Kommission Go (1983), Heft15, S.11-14, hier S.11-12. 「100人の囚人たちのためのバラックが14あったが、そこにはほぼ倍の数が押し込まれていた」という叙述から、「1800人」は「2800人」の誤植の可能性がある。
- <sup>15</sup> Ebd., S.12. ヴァーラートは収容所にいた当時を次のように思い起こしている。「収容所内でも活発にチェスが行われていた。[...] 私はすぐにチェスプレイヤーたちに『捕えられ』、1938年、収容所マイスターシャフトで勝利した。[...] 私が囲碁について語った際に反響が驚くほど大きかったことは、これら全てのチェス活動の結果かもしれない。[...] 比較的若い者たちは間もなく碁石と碁盤をそろえていた。彼らは理論を教えるよう私に迫った。」Vgl. Ebd., S.12-13.
- <sup>16</sup> 彼らにとって囲碁は、1939年の釈放後の活動にも役立つものであった。シッファーは釈放後のことを次のように回想している。「湿原の収容所から1939年に釈放された後、私はすぐにヴェルデマーを訪れ、再び非合法組織への結び付きを見出した。それから私は彼を通じて、ケルン出身の反ファシストたちへの結び付きも手に入れた。会議の際には、私たちは偽装のために囲碁をテーブルの上に置いていた。それにより私たちは非常に安全に感じた。つまり囲碁は私たちの非合法活動にも有益だったのである。」Vgl. Ebd., S.13.
- <sup>17</sup> Ebd., S.14.
- <sup>18</sup> Michael Buddrus: Totale Erziehung für den totalen Krieg. München (K. G. Saur) 2003, Band 13/2, S.1123.
- <sup>19</sup> Hans-Joachim Bieber: SS und Samurai. München (IUDICIUM) 2014, S.382.
- <sup>20</sup> Florian Panzer: Go. Japans Nationalspiel kommt nach Deutschland! In: Beyers für alle. Dezember 1936, S.26-27, hier S.26.
- <sup>21</sup> 福田正義: ドイツ人と囲碁 [『圍棋クラブ』第16巻第9号, 1940年, 10-15頁] 10-11頁。本稿には『圍棋クラブ』からの引用が複数あり、引用の際には可能な限り旧仮名遣いそのまま記載した。
- <sup>22</sup> Dr. My.: Ein neues „Gefecht“ auf dem Go-Brett. In: Völkischer Beobachter (8.1.1937), S.4.
- <sup>23</sup> 当時の『圍棋クラブ』の複数の記事において、ドイツに日本棋院支部を設置する旨が言及されており、本稿の注35はそのような記事の1つである。そして注28に引用した福田による記事には「ドイツの棋院ともいふべき圍碁協會」と述べられており、日本棋院側が「圍碁協會」を自らのドイツ支部と見ていたことがわかる。しかし、この「圍碁協會」がドイツ碁連盟とドイツ碁研究所のどちらを指しているのか断定できないという問題が残る。日本では„Deutscher Fußball Bund“が「ドイツサッカー連盟」とも「ドイツサッカー協会」とも訳され、また、„Institut“には「協会」という訳も当てはまるからである。明確なのは、電報対局後、日本棋院の支部と見做される団体がドイツに創設され、その活動に日本棋院からの支援があったということであり、そのことは次のデューバルの記事からもわかる。「本勝負 [日独電報対局] が全獨逸國で大評判となり『獨逸圍碁會 (ドイツチェア、ゴ、ブンツ) の生れる基となつた。一九三六年八月十七日に於ける、大倉男の獨逸圍碁クラブ訪問も亦日獨協力上非常に重要であつた。男は全獨逸碁客に自分を紹介し、且獨逸棋士の技倆向上に資する爲、日本より専門棋士を派遣しやうと決心した、次に一九三七年秋鳩山閣下がベルリンを訪問した、最後に全獨逸碁客の心よりの歓迎を更けて、福田五段が一九三七年十二月五日ベルリンに到着した。」Vgl. フェリクス・デューバル: 獨逸に於ける碁の發達を顧みて [『圍棋クラブ』第14巻第9号, 1938年, 5-6頁] 6頁。大倉喜七郎 (1882-1963) は1924年の日本棋院創設時の援助者で、1924年から1946年まで日本棋院副総裁を務め、その後1953年に名誉総裁となった。1964年、日本棋院は圍碁普及の功労者に贈る大倉喜七郎賞を創設した。この注で言及した点については、さらに文献を集めて考察したい。
- <sup>24</sup> ただし、ここで挙げた各人物の地位は、1940年の『圍棋クラブ』第16巻第10号における「ドイツ・アメリカ版」の編集開始に対し、ブラヒェッタが日本棋院に送った祝辞等に記載されている地位である。Vgl. 著者不明: 外國通信 [『圍棋クラブ』第17巻第2号, 1941年, 75-79頁] 76頁。今回私が入手した他の文献には、これらの地位に関する叙述を見つけることはできなかった。
- <sup>25</sup> Pratesi (2003), S.58-59. 乗客たちが研究所の部屋で過ごすことができたのか、研究のためにそれらの

- 部屋を利用することができたのか、研究所内で囲碁の授業が行われたのか、囲碁の大会や会議のために十分な広さの部屋があったのか等、不明な点が多い。また、研究所の研究テーマの1つは「ドイツ囲碁史研究 (1)」の最後に引用した囲碁の起原についての描写に示されており、ブラテージは研究所の研究のレベルの低さを指摘している。Vgl. Ebd., S.59-60.
- 26 Ebd., S.83-84; Franco Pratesi: Eurogo. Vol. 2. Part 3. Go in Europe 1949-1958. Part 4. Go in Europe 1959-1968. Roma (Aracne) 2004, S.87, 97.
- 27 Pratesi (2003), S.66. 1937年の初めには既に、実際にドレスデン、ライプツィヒ、ニュルンベルクで囲碁コースが試みられたが、成功には至らなかった。Vgl. Ebd. ナチス時代が訪れるまでドイツ囲碁界の中心的組織者であったドレスデンのリュウガーの活動が、この時代にも続けられていたことは、ブラテージによって言及されている。ブラテージは、リュウガーが『ドイツ碁新聞』内での自らの発言に従わないよう、友人たちに内密に伝えていた可能性を指摘している。また、リュウガーの『ドイツ碁新聞』発行が1945年まで続けられたことが同紙の2005年第2号の記事に示されている。Vgl. Ebd., S.41-50, 67; Siegmar Steffens: Zur Geschichte der Deutschen Go-Zeitung (2). In: Deutsche Go-Zeitung (2/2005), S.20-21.
- 28 Pratesi (2003), S.66. 地方においても囲碁普及が試みられていたことは、後述する福田の叙述から確認することができる。「ドイツの棋院ともいふべき圍碁協會は、其の本部をベルリンにおき、支部を各地方に置いてあります。中でも、ドレスデン、ハンブルグ、ニュールンベルグ、ミュンヘン、シユツツガルト、ダルムシユタツト、ケルン、ジユツセルドルフ等は主要な支部でありまして、私も度々参りましたが、却々盛んであります。」Vgl. 福田 (1940), 15頁。
- 29 Pratesi (2003), S.67-68.
- 30 Ebd., S.65. ブラテージは「当時の新聞」について具体的な新聞名を挙げておらず、ギュンター・シーソウ (Günter Cießow) から得た情報であることのみが言及されている。Vgl. Ebd.
- 31 1938年の『圍碁クラブ』第14巻第9号には次のような記事が掲載された。「一九三八年四月に獨逸最初の圍碁競技が開催せられた。優勝者は獨逸圍碁選手権保持者の稱號を得た。本競技には獨逸各都市の最強者が参加した。遺憾乍ら獨逸に於ける圍碁第一人者デユバル教諭は健康上本競技に参加出来なかつた。全競技期間福田正義五段は最高審判官として出席せられた [...]。」Vgl. フリツェ・デューバル博士：第一回獨逸圍碁競技 [『圍碁クラブ』第14巻第9号, 1938年, 4-5頁] 4頁。
- 32 大戦時、大会に参加する兵士たちに帰還が許されたことが1940年の福田の記事に示されている。「前述の如く、一年一回全ドイツ圍碁選手権大會を開催し、全ドイツから我こそと自負する碁人が、集つて覇權を争ひます。そして大會後には一週間も二週間も講習會を開きます。今年——昭和十五年は恰も國運を賭しての大戦争中であり、逆も例年通りの圍碁大會ではあるまいと思つて居りました處、彼地からの消息に依りますと、今年三月に例年通り選手権大會を開催し、大會に参加する希望のある者は、わざわざ戦線から歸還を許されたとの事であります。」Vgl. 福田 (1940), 15頁。
- 33 佐藤彰三——野上彰：全ドイツ圍碁選手権大會 國際電話 (ベルリン——東京) 昭和十七年四月七日午後七時半 [『圍碁クラブ』第18巻第5号, 1942年, 20-25頁] 20-22頁。大会の様子を報告したのは元内務省書記官の佐藤彰三であり、『圍碁クラブ』第17巻第1号には、三国同盟の結果、1941年末に彼がベルリンの新たなポストに就くこと、そして彼が日本棋院から三段の段位を与えられた公務員最強のプレーヤーであることが述べられている。また、彼は滞独中、イギリスによるベルリン空爆の最中に、デューバル及びその娘と対局したことを報告している。Vgl. Anonymus: Herr Sekretär Sato geht nach Berlin. [『圍碁クラブ』第17巻第1号, 1941年, ドイツ・アメリカ版 11頁]; 佐藤彰三：空爆音下の對局 [『圍碁クラブ』第18巻第8号, 1942年, 14-15頁]。
- 34 1938年から1944年までのドイツ選手権及び日独対抗戦については次の文献を参照。Pratesi (2003), S.73-77. また、本章で言及したドイツ囲碁界の活動のために巨額の資金を提供したパトロンとして、ヴォルフガング・アンガー (Wolfgang Anger) が挙げられる。彼はベルリンで生産されたビールを東洋の市場で販売するために、日本とのより良い結びつきを求めて、囲碁界のスポンサーを始めたようである。アンガーもブラヒェッタ同様第2次世界大戦を生き延びたが、大戦末期に全財産を失い、その後ウルグアイで貧しく暮らし、1953年6月にそこで亡くなった。Vgl. Ebd., S.69.
- 35 著者不明：日獨電報書の波紋 日本の専門棋士に是非来てくれ ナチス國內の圍碁熱 [『圍碁クラブ』第13巻第1号, 1937年, 8頁]。
- 36 著者不明：ドイツの圍碁熱 三千名を突破したゴ・ナチスの鼻息 棋院から福田五段を迎えていよいよ本格的に!! [『圍碁クラブ』第13巻第8号, 1937年, 2-3頁] 2頁。
- 37 福田の滞独期間は1年8か月であった。Vgl. 福田 (1940), 15頁。
- 38 福田正義：伯林より [『圍碁クラブ』第14巻第8号, 1938年, 2-4頁] 2-3頁。
- 39 Pratesi (2003), S.70, 72.
- 40 Walther Blachetta: Wir spielen auch „Go“. In: Schach (1938), Heft3, S.36-39, hier S.39.
- 41 Walther Blachetta: Vom Go in Deutschland. [『圍碁クラブ』第17巻第3号, 1941年, ドイツ・アメリカ版 5-7頁] 5-6頁。

ドイツ囲碁史研究（2）

<sup>42</sup> Ebd., 6頁。

<sup>43</sup> 福田（1940）, 10頁。

<sup>44</sup> Masayoshi Fukuda: Das „Go“ Spiel und der japanische Geist. [『囲碁クラブ』第17巻第1号, 1941年, ドイツ・アメリカ版 1-5頁] 4-5頁。

<sup>45</sup> Pratesi (2003), S.79.